

「大学の世界展開力強化事業Ⅱ(「開かれたASEAN+6」による日本再発見)参加報告書」

京都大学文学部・研究科修士1年 金子大智

1. 学習成果について

今回の派遣に参加する以前から(長期の)留学を行いたいと考えていたが、今回の派遣を通してその思いが一層強くなった。その理由は以下の二点である。一点目は、外語語文献を研究対象とする場合にはやはりその国の文化を深く知ることがとても重要であると実感されたためである。シンガポールの大学では基本的に英語が主要言語であるが、今回の授業と発表という二つのプログラムを英語で実践するにあたり、英語が単に文献で使われる情報媒体としての記号ではなく、思考の仕方や習慣を形成する基本であるということが痛感させられた。英語がこれから世界の主要な言語になっていく情勢を考慮すると、日本の中だけで文献を読むということだけでは情報の範囲の狭さという点でも十分な研究ができるとは言い難い。本派遣のおかげで、この重要性が体験として知りることができた。二点目は、授業や発表に対する十分な環境が得られたということである。海外での生活は、自分の今まで身に着けてきた習慣や常識が通じるものではなく、自分で新たな状況や環境に対して適応し、自分の生活をコントロールしなければならない。今回の派遣では、授業は一日1回のペースで行われ、十分な授業準備ができた。また、洗濯や食事、体調管理などの日本ではあまり意識して行わない日常生活のことも、学習という目的のもとでかなり意識的に管理しながら行った。今までの習慣とは異なる環境での研究生生活は、以上の意味で研究をより一層生産的で有意義なものにしてくれると思われる。

2. 海外での経験について

シンガポールの人種の多様性とその共生を実感できた。彼らは言語も容姿も明らかに異なることが分かるが、(特に大学内では)そのような違いがまるでないかのように普通にコミュニケーションをとっている。もちろん人種ごとのまとまりでいることが多いが、それでも異なる人種間での対立はあまり感じられなかった。例えばフードコートなどではムスリムを考慮して食器が色分けされており、豚料理に触れることがないような配慮がされていた。また、標識や看板などについては、危険を表すなどの重要な物には公用語である英語・中国語・マレー語・ヒンドゥー語の四言語で必ず表記されている。もちろん現実的な政策での統制や貧富の格差などの別の問題はあるが、少なくともこの地球上でこれ程までに多人種が共生している地域を体験できたことは貴重な経験である。また、酒と煙草に関して、日本と異なる扱いであった。酒は、基本的に種類が少なく、比較的割高であった。これはムスリムが多いことが文化的背景にあるからであろう。また煙草は、そのパッケージに病氣化した胎児や大人などの衝撃的なイラストや写真が貼られており、また日本の約1.5倍の値段で売られていた。政策を迅速に行う政治的あり方を知ることができた。

3. プログラム内容

プログラム内容は大きく二つである。一つ目は、合計6つのセミナー出席である。テーマは「映像的思考」「帰納的確率」「ヒュームの哲学」「心の哲学」「アリストテレスの形而上学」「カントの美的判断」で、基本的には事前に読んだ英語文献の内容確認と問題点の提示、それに関する教師と学生での議論という構成の授業であった。二つ目は、京都大学とYell-NUSの大学院生による合同カンファレンスへの出席および発表である。京都大学からは私を含めて4名(そのうち2名は合同発表)がプレゼンテーションを行った。また、上記二つのプログラムの事前準備として、各授業の事前勉強会やカンファレンスの発表の事前合同練習を行った。

4. 進路への影響

今回の派遣において、自分の研究における海外留学の必要性が改めて実感できた。自身の専門領域での言語(フランス語)を用いる文化圏への留学を是非ともしてみたい。また、アジア圏においても英語による高度で活発な議論が行われているので、日本においても英語での議論や日本語での高度な議論が現実的に可能であるということが実感でき、日本にいる間に語学力の向上や専門領域の一層の勉強など、増々の研鑽が必要であると痛感させられた。